様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３３１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０７１５

研究課題名（和文）小学校英語活動におけるＩＣＴを活用した国際交流プログラムの構築

研究課題名（英文）Helping Japanese Public Elementary School Pupils to Learn How to Write and Read through ICT and International Exchange Programs

研究代表者
山本　淳子（YAMAMOTO, Junko）

新潟経営大学・経営情報学部・教授

研究者番号：３０３７２８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：2020年に予定されている小学校での英語教科化に備え、英語四技能を効果的に伸ばせるように、小学校5,6年生に対して、ICTを活用したカリキュラム・教材開発を行った。また外国語活動において1つの目標である「国際理解」を推進し、同年代の子どもたちと英語を使って交流するという目的を持たせ、話す・聞くに加え、読み書きへの動機づけを図るために、海外との国際交流を行い、その結果をテキストマイニング手法で分析した。さらに四技能をバランスよく伸ばす方法として、iPodなどの携帯端末ツールで使えるICT教材の開発し、実践し、アクティブラーニングを展開しその効果を測定した。

研究成果の概要（英文）： This study aims at helping EFL elementary school pupils acquire literacy skills and examines how they responded to the methods. The three methods were an international exchange program, a learning-through-movie program, ICT programs. To analyze the pupils' answers to open questions, text mining software was used. Few students mentioned literacy learning for this question; however, considering most students regarded the activities as fun, these approaches are thought to be meaningful in helping pupils learn written skills.
An ICT-based EFL study investigated the change of motivation of nine Japanese EFL (English as a Foreign Language) elementary school children who received an educational intervention of ICT (Information and Communication Technology) based activities. Questionnaire results show that participants enjoyed the activities in which mobile devices were employed. Judging from free description data, their motivation level was enhanced.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育　小学校外国語活動　ＩＣＴ

１．研究開始当初の背景

2011 年から小学校で英語が必修化となり、2020 年には、教科とすることが計画されている。しかし、誰が何をどうやって教えるかということについての共通認識は十分ではない。全国 40 万人いる小学校教員のうち、中・高等学校の英語の免許を取得している割合は、公立小学校で 3.7%、私立小学校でも 4.0%にとどまっている。

指導要領で「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には，アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては，児童の学習負担に配慮しつつ，音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」となっているため、文字を読み書きさせる指導は多くの私立小学校や英語教育特区の公立校、一部の公立校で行われているのみである。小・中・高の連携を考えれば音声面を中心としながらも、文字学習を導入し、わずかでも読めたり、書けたりする経験をさせることが望ましく、その経験がのちの英語学習への動機づけにつながると考える。

ただし、その手法には工夫が求められる。畑江(2011)は、「中学入学時には英語学習へのやる気がある」児童たちが、「4 技能習得の統合が早急に求められること」で「中 1 の後半に英語を苦手と感じ始める生徒が最も多くなる」という問題を指摘している。小・中連携を考えるあまり、知識を詰め込んでしまうことになれば、小学生の段階でその苦手意識を持ち始めてしまうことになりかねない。第二言語習得理論においては、子どもには「自然に」外国語を身につける能力が（大人よりも）残っている（白井(2012)）ことから、文字指導を行う際には、できるだけインプット中心にして、児童の負担にならないようにするべきである。

そこで本研究では、児童が、無理なく英語 4 技能を習得することを目指し英語の動画を含む ICT を活用した実践を行い、その効果を測定することとした。

２．　研究の目的

研究の目的は、「文字指導を含めた英語活動が児童に受け入れられたかどうかを確かめる」ことと、ICT やマルチメディアを活用した英語学習の実践を行いその効果を確かめることである。

(1) DVD を用いたマルチメディア利用

小学生の英語学習においては、歌やゲームなどを利用したリズミカルなアプローチで楽しく英語に親しませること、四技能の中でも、話す・聞く能力を伸ばすことが第一目標になっているが（小池編 2004）高学年（11 歳、12 歳）になるとピアジェが示した「形式操作期」に入り、分析的思考を持つようになるため、これまで低学年・中学年の総合的な学習の時間などで行われてきたゲームや歌、チャンツなどだけでは、高学年児童の知的好奇心を満たすことが困難となる。またそういった活動に対して照れくささが出てくるのも高学年の特徴である。そこで、高学年を対象とした、知的好奇心を満足させる教材が必要となってくる。文字を利用した学習にも興味を持つようになると言われている(國本、1998、 JASTEC 関東甲信越支部　調査研究プロジェクト・チーム、1999) 。

子供向けの DVD 映画をもとにして操作を単純化した使いやすく楽しい機能を持つ学習システムを提供することで、英語の読み書きに興味を持ち始めた子どもの英語学習への動機づけをはかることを目的とする。

(2)国際交流

体験的に言語や文化についての理解を深めるには、その文化を持つ人々との交流を体験すべしと理解できる。海外の同年代の子どもたちにメッセージを伝えたい，相手からのメッセージを理解したいという目的を持つことで、英語をコミュニケーションの道具としてとらえるきっかけになろう。また、Hi, friends!１，２ で覚えた表現を実際に使うことで、学習項目の定着を図ることができる。

(3) ICT

窪田（2001）は、映画を教材とすることで、「生徒は映画を通じて外国の文化や言葉を理解したり、生活や習慣、歴史や伝統、人々の考え方や生き方を知ったり、過去、現在、未来の出来事に出合うことができる」と述べている。特にアニメーションは「子どもたちの精神生活の中に深く入り込んでおり、彼らに親しまれている映像は友だちとの間でも常に話題となるので、言葉や文化の理解に効果的といえる」（窪田（2001））とある通り、アニメを通して、主人公の真似をしながら楽しく学べる。さらに映像とともに文字を見せることで、音声と文字を結びつけることができる。Paivio（1986）が提唱する Dual-coding theory（二重符号仮説）によれば、音声と文字・映像を組み合わせた複数情報提示が情報の記憶につながるため、外国語学習に効果がもたらされる。横田（1997b）は「音声指導に文字による確認作業が加わると定着が促進される」と述べている。児童にとって魅力的な映画を使って聞き取り練習を中心に行ない、文字で理解を助けることで、言葉の定着を促すことができると考えた。

iPod を使った小学生向けのコミュニケーション型英語学習ソフトを開発し、児童が主体となり自分が学びたい単語をデータベース化させることで、どれだけ児童の動機付けが高まるかを測定することとした。

３．研究の方法

(1) 国際交流

本実践を行うにあたり、インターネットで交流校を探した。日本の小学生はほとんど英語の読み書きができないことを踏まえ、英語を

外国語として学ぶ国であること、かつ日本の小学生と交流を望んでいる学校であることを条件として、今回の実践では香港の九龍市にあるＣ小学校に依頼した。交流前に写真を交換して、互いに親近感が持てるようにした。まず、ひな形に従って、学んだ表現を生かして簡単な手紙を書かせ。また、先方から来る手紙については、日本の児童が読めるように、あらかじめ、こちらが書いた内容にそって、できるだけ同じ、シンプルで短い手紙を書いてもらえるよう、先方の先生に依頼をした。こちらの児童数が二クラス、68 人で、先方は 30 人だったので、日本側は 2 人組にし、先方からの手紙を 2 人で読ませるようにした。手紙の交換の他、お互いの文化を紹介しあうポスターを交換した。DVD はアメリカのアニメーション、『トイ・ストーリー』を利用した。基礎的で、よく使われる表現や簡単な挨拶（Hello、Hi など）や、Hi, friends!で学んだ表現（Let ’s～、I can～など）を含む場面を抜き出し、マイクロソフト社のソフトである「ムービーメーカー」を使って、5 秒～10 秒程度の映像クリップを作った。これを何度も見せたあと、セリフを聞き取ったり、登場人物になってセリフを言わせたりする活動を行った。　慣れたところで、動画に合わせてセリフを提示して、それを読ませたり、プリントでセリフを読んだり書いたりする活動を行なった。

(2) LINE を用いた授業実施方法
iPad や iPod などのタブレット機器を操作させ、指導者が与えるタスクをやり遂げることで、有能感を持たせた。また、活動は 3 人ずつのグループ単位とし、互いの学びを共有したり、協力して問題解決に取り組ませたりすることで、関係性の欲求が満たされるよう配慮した。
《個人単語練習バージョン》
①覚えたい対象を撮影する
②先生に見せて「tell me!」と聞く
③先生と共に発音を練習する
④生徒がボイスメッセージ機能を用いて発音を入れる
⑤先生にボイスメッセージを聞かせてスペルを聞く
⑥スペルを先生と一緒に入力する
⑦繰り返す
《クラスレッスン・バージョン》
① 先生の LINE アプリにグループ登録して行う
② 先生は LINE アプリを起動して生徒全体に写真を見せて「What is this?」と聞く
③ 登録した生徒が答える
④ 繰り返す
《テスト・バージョン》
① 先生の LINE アプリにグループ登録して行う
②先生は LINE アプリを起動して個別に写真を見せて「What is this?」と聞く
③ 生徒が答える

４．研究成果

国際交流では、全員が手紙を書いたり読んだりすることができた。内容はひな形に従ったもので、自分で文面を考えたり、ひな形以外の内容を書いたり読んだりできるまでには至っていないが、文字を使ったコミュニケーションが実現できた。どんなにシンプルな英語であっても、それが通じることがわかれば、大きな自信につながる。目標言語が話されている国の子どもとの交流をするという目的を持つことにより、内発的動機がを高めることができた。同世代の子どもたちとの英語による交流は、児童の印象に残りその後の英語学習においても好ましい影響を及ぼすと考える。

映画を利用した指導では、児童たちが、「聞く・話す」に加え、「読む・書く」活動に積極的に参加する様子が観察された。児童がよく知っている人気のある映画（トイ・ストーリー）だったこともあり、もっとも児童の印象に残っていた。トイ・ストーリーは「英語」という単語との関係性が最も強く、トイ・ストーリーで英語を学ぶことができたと考える児童が目立った。学んだ表現をアウトプットさせたところ、10 問中 8 問について 6 割以上の児童が答えることができた。また女子の方が、男子よりも正確にアウトプットできる傾向がみられた。偏差値で上位、中位、下位にグループ分けして、文字学習についての考えとのクロス集計カイ二乗検定を行ったところ成績に関わらずどのグループの児童も、「読み書きすると覚やすい」と考える傾向にあったことが示唆された。

ICT 利用実践に関しては、アンケート調査（「1 大変やる気がでる」から「5 全くやる気がでない」の 5 件法アンケートと自由記述アンケート）を併せて分析した。その結果、有能感については 9 人中 8 人の児童、自律性の欲求については、2 人の児童、関係性の欲求については 1 人の児童に有意差がみられた。5 件法、自由記述アンケートのどちらに関しても、1 人を除いた 14 人が実践を好意的に受け止めたことが明らかになった。

全体的に動機付けは高まったが、有意差で見る限り顕著な向上がみられたのは、有能性の欲求のみであった。期間も対象人数も少ないため一般化はできないが、機器の操作を通して、児童が有能感を持っていることを観察することができた。身近なタブレット機器を利用した英語活動についての考察を論文にして発表した。

小学生には難しいとされる英語の「読む」、「書く」技能についても、国際交流、映画を含む ICT 教材を利用することで、効率的に習得でき英語学習に対する動機付けも高められることを明らかにしたことが本研究の成果である。

＜引用文献＞
① Paivio, A.、 Mental representations: A dual coding approach. New York: Oxford University Press、1986

② 國本和江、「E-mail 交換による児童の Writing Skill と海外の文化の認識」『日本児童英語教育学会研究紀要』、1998、79-90

③ 窪田　守弘、「映画の醍醐味と教材としての活用法」国際文化フォーラム通信. No.49, 2001 、2-3

④ 白井恭弘、『英語教師のための第二言語習得論入門』、大修館書店、2012

⑤ 畑江美佳、「英語を「読む」技能習得のための小・中連携―小学校からできる文字指導、中学校へ繋げる文字指導―」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』 No.12, 2011、121-132

⑥ 文部科学省『Hi, friends! 1』『Hi, friends! 2』、東京書籍、2012

⑦ 横田玲子、「ホールランゲージの教室から―アメリカの言語教育事情『動物』のテーマ学習」『英語教育 6 月号』、大修館書店、1997b、34-36

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）
① 山本淳子、仲川浩世、横山泰、東川輝久、Teaching EFL Elementary School Children in Japan-The Use of ICT to Enhance Motivation-、新潟経営大学紀要、査読なし、第 22 号、2016、27-34

② 仲川浩世、小学校における外国語活動展開事例の検討-授業観察記録を基礎として、関西外国語大学研究論集、査読あり、101 巻、2015、167-181

③ 山本淳子、小学校英語活動における文字指導の実践-自由記述からみた小学生の意識、Media, English and Communication（日本メディア英語学会）、査読あり、4、2014、141-160

④ 山本淳子、 Promoting English Literacy for Young Learners in Japan through International Exchange、新潟経営大学紀要、査読なし、第 19 号、2013、59-72

〔学会発表〕（計　6　件）
① 横山泰、東川輝久、山本淳子、教職課程学生に向けたアプリ作成授業の取り組み、公益社団法人私立大学情報教育協会教育改革 ICT 戦略大会、2014 年 9 月 5 日、アルカディア市ヶ谷（東京）

② 山本淳子、仲川浩世、 Helping Public Elementary School Pupils to learn How to Read and Write English 、 AILA World Conference 2014、2014 年 8 月 14 日、ブリスベン（オーストラリア）

③ 山本淳子、仲川浩世、小学校における四技能を統合した英語活動の実践、日本メディア英語学会、2013 年 11 月 10 日、関西大学（大阪）

④ 山本淳子、英語活動における文字指導の実践、小学校英語教育学会、2013 年 7 月 14 日、琉球大学（沖縄）

⑤ 山本淳子、仲川浩世、鈴木輝暁、小学校英語活動における文字指導の実践について、情報処理学会第 118 回コンピュータと教育研究発表会、2013 年 2 月 9 日、東京農工大学（東京）

⑥ 山本淳子、仲川浩世、小学校英語活動における映画を利用した文字指導の可能性、映画英語教育学会西日本支部大会、2012 年 11 月 25 日、京都外国語大学（京都）

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　淳子（YAMAMOTO, Junko）
新潟経営大学・経営情報学部・教授
研究者番号：30372832

(2)研究分担者
仲川　浩世（NAKAGAWA, Hiroyo）
関西外国語大学短期大学部・英米語学科・准教授
研究者番号：70571595

(3) 研究分担者
鈴木　輝暁（SUZUKI, Teruaki）
新潟経営大学・経営情報学部・教授
研究者番号：60584331
（平成 25 年度に削除）

(4) 研究分担者
横山　泰（YOKOYAMA, Hiroshi）
新潟経営大学・経営情報学部・准教授
研究者番号：40454219
（平成 25 年度より研究分担者）

(5) 研究分担者
東川　輝久（HIGASHIKAWA, Teruhisa）
新潟経営大学・経営情報学部・講師

研究者番号：70567601
（平成 25 **年度より研究分担者）**